

## 多言語展開を考慮に入れた英文ライティング

中村哲三<sup>†1</sup>

マニュアルなど製品付属ドキュメントのローカリゼーション(多言語展開)をスムーズに進めるために、そのローカリゼーションのマスターとなる英語版を世界中の読者に対してわかりやすくする方策を検討する。世界中の読者を対象とした英文ライティングを検討することで、「世界共通語」としての「グローバルイングリッシュ」を目指していく。

### English Writing for Facilitating Localisation Processes

Tetsuzo Nakamura<sup>†1</sup>

The purpose of this report is to find out and employ appropriate methods to make English documents easy-to-understand for readers and translators around the world, which facilitate localisation<sup>†2</sup> process of documents bundled with products, accordingly, since the English versions are usually used for the source of localization. Writing and pursuing easy-to-understand English documents for the audience of the world leads us to form “Global English” as a Lingua Franca in the modern world.

#### 1. 背景

グローバル化を目指す日本メーカーにとって、世界市場同時発売(Sim Ship)は大きなテーマであり目標でもある。ところが、Sim Ship のボトルネックともなる海外向け製品付属ドキュメント(多言語マニュアル)については、英語版も含めて必ずしも評判が良いわけではない。その原因を探っていくと、往々にして、ローカリゼーションのマスターとなる英文ドキュメントの問題にたどりつく。つまり、日本で制作する英文ドキュメントの内容がわかりにくかったり誤解されやすかったりするために、その先の多言語ドキュメントの内容が英語版以上にわかりにくいものになってしまうのである。

この原因を検討していくと、以下の<表 1>のように、制作プロセスごとにいろいろ

な問題が考えられる。

表 1 制作プロセスごとの問題点

プロセス	問題点
① 開発仕様書 :	情報伝達する際の日本語のわかりにくさ、誤解を与える表現
② 日本語での開発情報 :	情報伝達する際の日本語のわかりにくさ、誤解を与える表現
↓ ↓	
③ 日本語ドキュメント :	英語翻訳する際の日本語版のわかりにくさ、誤解を与える表現
↓ ↓	
④ 英語ドキュメント :	多言語翻訳する際の英語版のわかりにくさ、誤解を与える表現
⑤ 多言語ドキュメント :	誤訳や訳抜けなど、多言語自体の問題

ここでは直接的な問題としてよく見聞きする「④ 英語ドキュメント」のわかりにくさをどのように改善していくかを検討する。(当然のことながら、「① 開発仕様書」～「③ 日本語ドキュメント」の日本語コミュニケーションの問題についても検討する必要があるが、ここでは論じない。)

#### 2. 英文ドキュメントの問題

ローカリゼーションを考慮したときの英文ドキュメントの問題は、内容のわかりにくさや誤解を与える表現に集中する。内容のわかりにくさや誤解を与える表現は、英語版自体にとっても問題になるが、その問題はローカリゼーションにとってはさらに深刻なものになる。翻訳者が内容を理解できないと、疑問点を問い合わせたりすることで翻訳にかかる時間が長くなるし、下手をすると誤訳につながることになる。また、誤解を与える表現があると、ほかの言語でも同じように誤解を与える表現になるし、悪くすると大きな誤訳になりかねない。

したがって、英文ドキュメントの問題を解決することは、英語版の品質向上につながるだけでなく、多言語版の品質向上にもつながる。多いときは40言語近くまで多言語化されることを考えれば、その効果は少なくない。

英文ドキュメントの問題とその原因を分類すると、以下のようになる。

- ① 内容のわかりにくさ → [原因] 論理的な非整合、不適切な英語表現
- ② 誤解を与える表現 → [原因] 不適切な英語表現

以下に、「誤解を与える表現」を例示する。

・ 誤解を与える表現例

All the data items shown in Fig. 7 have a numeric value.

[訳文] 図7のすべてのデータ項目は、1つの値を有する。

日本語は「数」についての概念が希薄なので、このような曖昧な表現であってもそう違和感はないかもしれない。しかし、この例文は以下のように4とおりの解釈ができる。

- ① すべてのデータ項目が同じ値を持つのか？
- ② すべてのデータ項目が任意の値を持つのか？
- ③ それぞれのデータ項目が任意の値(重複することもある)を持つのか？
- ④ それぞれのデータ項目が異なった値を持つのか？

したがって、それぞれの意味に特定できるようにスペシフィックに表現する必要がある。

- ① All the data items shown in Fig. 7 have the same numeric value.
  - ② All the data items shown in Fig. 7 have numeric values.
  - ③ Each data item shown in Fig. 7 has a numeric value.
  - ④ Each data item shown in Fig. 7 has a unique numeric value.
- (The Global English Style Guide<sup>13</sup>より)

### 3. 想定される英文ドキュメントの読者

英文ドキュメントの読者は、英語ネイティブに限定されない。英語を第2外国語として使用する人々も含まれる。

英語は日本語と異なり、世界中の多くの人々の間で使用されており、今や「世界共通語」(Lingua Franca)としての地位を確立している。総務省統計局によれば、世界の総人口は2007年で66.7億人である。そのうち、英語を公用語または準公用語として使用しているのは、20.1億人=30%にのぼる。英語は、世界の約1/3もの人々によって日常的に使用されているのである。

それに対して、製品付属のマニュアルの場合、英語版から翻訳されるなどして入手できる可能性のある言語としては、FIGS<sup>14</sup>、ロシア語、ポルトガル語、中国語、日本語などがある。この8言語の人口を合わせると24.6億人=36.9%となる。つまり、英語(20.1億人)+8言語(24.6億人)=44.7億人=67%が、自国語でマニュアルに接することができることになる。

それ以外の残りの22億人=33%の多くが、次善の策で第2言語として英語版マニュアルを使う可能性が高いと仮定すると、英語(20.1億人)+22億人=42.1億人=63.1%の人々が英語を使用することになる。このことを考えると、英語版は、日本語やドイ

ツ語のように特定の国に「特化」させるのではなく、より幅広い層に理解されるように「一般化<sup>15</sup>」し、本当の意味での「世界共通語」を目指す必要がある。

「世界共通語」を目指すために英文ドキュメントに求められる要素

- ① 「一般化」されて、英語ネイティブでない人たちでも理解できる
- ② 翻訳者がスムーズに翻訳できる

### 4. 英文ドキュメントの一般化 (英文をわかりやすくする必要性)

ローカリゼーションを適切に進めるために、ローカリゼーション(多言語化)の前に英文ドキュメントを「一般化」する必要がある。

#### 4.1 一般化とは

以下、業界団体の1つであるLISA<sup>16</sup>の定義に基づいて「一般化」について説明する。ローカリゼーション業界では、企業のドキュメント関連活動をGILT<sup>17</sup>というアクロニムで表現する。GILTは、Globalization, Internationalization, Localisation<sup>12</sup>, Translationの頭文字語から成っている。企業が「グローバル化」= Globalizationを実現するためには、まず製品自体や付属のドキュメントを「一般化」= Internationalizationして、それらを世界中どこでも違和感なく使用できる、地域性のないより普遍的なものにする必要がある。世界中でよく売れる製品やわかりやすいドキュメントにするためである。「一般化」できたところで、製品や付属のドキュメントを「地域化」=ローカリゼーション= Localisationする。「翻訳」= Translationはローカリゼーションプロセスでの1アクティビティに過ぎない。以上の内容から、GILT相互の関係は、以下の<図1>のように表現できる。

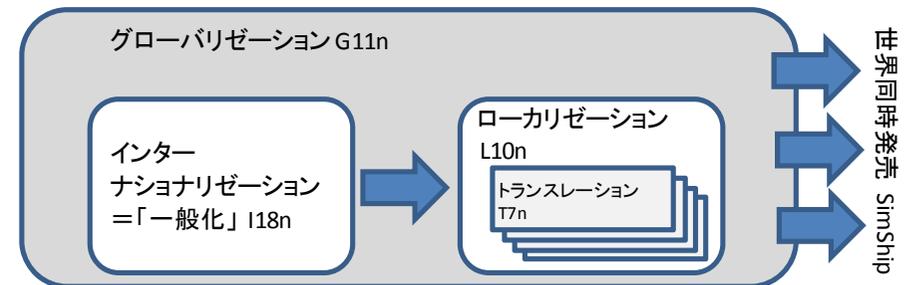


図1 GILT相互の関係

この図で明白なように、ローカリゼーションを成功させるためには、ローカリゼーションの前にまずマスターとなる英文ドキュメントの「一般化」を行なう必要がある。

#### 4.2 一般化の要素

英文ドキュメントをわかりやすくするために「一般化」する要素を大別すると、

- ① 英文ドキュメントの構成や内容(パラグラフまたは文章単位) と
- ② 個々の英文(文単位) に分けられる。

① 英文ドキュメントの構成や内容をどう「一般化」するかについては、それぞれのドキュメントの内容に依存するので、ここでは、② 個々の英文単位での「一般化」について考えることにする。

#### 4.3 英文ドキュメントの一般化により得られる効果

英文ドキュメントの「一般化」を行なうことで、「わかりやすさ」が改善され、以下のような効果が期待できる。

- ① 英語版自体の品質が向上する
- ② ローカリゼーションが効率化される
  - ・ 時間短縮 (翻訳者が疑問なく翻訳を進められる。手戻りが少なくなる)
  - ・ コスト削減 (訂正費用が減る。TM 上の表記のゆれが減る)

Developing Quality Technical Information (2009, IBM)によると、「わかりやすさ」= Easy to understand は以下の3つの「品質特性」=quality characteristics を包含する。

- ・ Clarity 明快性
- ・ Concreteness 具体性
- ・ Style スタイル性

#### 4.4 わかりやすさの品質特性と関連した技術/ツール

上記の「わかりやすさ」の3つの品質特性を向上させるための技術やツールとしては以下のものが考えられる。

- ・ 明快性 → ①テクニカルライティング、②シンプリファイドイングリッシュ<sup>18</sup>、③スタイルガイドライン
- ・ 具体性 → ①テクニカルライティング、②シンプリファイドイングリッシュ、③スタイルガイドライン
- ・ スタイル性 → ③スタイルガイドライン、④ライティング支援ツール

これまで、「わかりやすさ」と言えば、①や②などの英文ライティング手法だけが

注目されてきた。しかし、①テクニカルライティングは、英語ネイティブにとって論理的でわかりやすい英文ドキュメントを提供するために開発されたものであるし、②シンプリファイドイングリッシュは、非英語ネイティブ向けにブロークンではあるが即席の理解を促進する英語であり、いずれも片手落ちの印象があった。ここでは、これまで「わかりやすさ」改善のための手法としてあまり検討されてこなかった③スタイルガイドラインに焦点を当てる。「スタイル性」を要約すると、「ライティングルールや用語が正確で適切なのでわかりやすい」ということである。③スタイルガイドラインを適切に利用することで、英文の「一般化」を促進し、「わかりやすさ」を改善する。

### 5. 一般化を促進するためのスタイルガイドライン

「一般化」を促進する、つまり「わかりやすさ」の品質特性である「スタイル性」を向上させるためのスタイルガイドラインを検討する。

#### 5.1 英文ライティングのスタイルガイドラインの種類

英文ライティングのスタイルガイドラインの例としては、以下のようなものがある。

- ① Chicago Manual of Style (CMOS) シカゴマニュアル
- ② Modern Language Association Style Guide (MLA SG) MLA スタイルガイド
- ③ American Psychological Association Styles (APA S) APA スタイル
- ④ Microsoft Manual of Style (MS MOS) マイクロソフトスタイルマニュアル
- ⑤ Government Printing Office Style 2008 (GPO S) 米国政府印刷局スタイル
- ⑥ ASD-STE100 (ASD) シンプリファイドイングリッシュ(欧州航空宇宙防衛工業界)
- ⑦ IEC 62079 International Standard ドキュメント評価の世界共通規格(ISO)
- ⑧ Usable and safe operating manuals for consumer goods (TCeuropa)
- ⑨ A Plain English Handbook (SEC)プレインイングリッシュ(アメリカ証券取引委員会)

上記①～⑥のスタイルガイドラインはすべて「コミュニケーションを進めるための基本的な約束ごと」であり、わかりやすさのためのものではない。また、⑦と⑧はわかりやすさについても言及はしているものの、具体的に踏み込むことができていない。特筆すべきものとしては⑨がある。これは、有価証券の情報開示書類をわかりやすく書くための簡易的な指針になっている。これは英語ネイティブ向けの、いわゆる Plain English に分類されるものである。この考え方をベースにした、世界中の読者にとってわかりやすさに特化した体系的なスタイルガイドラインが必要である。ローカリゼーションにおいては、翻訳者が困らないようにするために、構造上、文法上、用語上、

表記スタイル上、すべての面でわかりやすくする必要はある。

## 5.2 わかりやすさを促進するためのスタイルガイドライン

最近「わかりやすさ」を促進するためのスタイルガイドラインとして注目されているものに、The Global English Style Guide<sup>†3</sup> (2008, SAS)がある。以下に、The Global English Style Guide(グローバルイングリッシュスタイルガイド)の内容を紹介し、その効果をまとめる。

### 5.2.1 グローバルイングリッシュスタイルガイドの章構成

章構成は、以下のとおりである。

- 第1章 グローバルイングリッシュとは(概要)
- 第2章 標準的な英語表現を心がける
- 第3章 簡潔なライティングを心がける
- 第4章 修飾語を明快に使用することを心がける
- 第5章 代名詞の意味を明快にして翻訳しやすくする
- 第6章 「構文上の手がかり」を使用する
- 第7章 -ING 形の意味を明快にする
- 第8章 句読法とキャピタリゼーション
- 第9章 不適切な用語やフレーズをなくす

### 5.2.2 グローバルイングリッシュスタイルガイドの各章の内容

ここでは、第2章、第3章、第4章、第6章、第7章、第8章から1例ずつ例示し、「わかりやすさ」と「ローカリゼーション」の観点でその内容を検証する。

・第2章 標準的な英語表現を心がける  
たとえば、名詞を使用する場合、標準的な名詞にすべきである。

[例] - 誤 This action explains how to change the text of items in the **pop-up**.

- 正 This action explains how to change the text of items in the **pop-up menu**.

多くの言語では、名詞にジェンダー(男性形、女性形、そしてときに中性形)がある。“pop-up”のような形容詞は、修飾する名詞のジェンダーによって、その語形が変化することになる。したがって、その単語を翻訳するためには、まず“pop-up”がなにを修飾しているのか知る必要がある。ということで、単に“pop-up”だけで終わるのではなく、“pop-up menu”というように完全な名詞句にすべきである。前述の「2. 英文ドキュメントの問題」でも取りあげた「数」の問題もこの章で説明されている。

・第3章 簡潔なライティングを心がける  
たとえば、文を途中で中断したりしない。

[例] - 誤 You can, **however**, use a RETAIN statement to assign an initial value to any of the previous items.

- 正 **However**, you can use a RETAIN statement to assign an initial value to any of the previous items.

“however”や“therefore”、“nevertheless”などの副詞を文の途中に入れると、可読性を損なうことになる。こういった副詞は、前文との論理の展開の方向を示している。論理の展開の方向を示す副詞/副詞句は文頭に置く。同様の理由から、非英語ネイティブの読解を妨げる倒置法は使用すべきではない。

・第4章 修飾語を明快に使用することを心がける  
たとえば、関係詞節がなにを修飾するのか明確にする。

[例] - 誤 Click Overview to view short descriptions of the products that include information links.

- 正 Click Overview to view short descriptions of the products. **Each description** includes information links.

関係詞節が直近の名詞“products”にかかるのか、その前の名詞“descriptions”にかかるのかわかりにくい。2つの文に分けて、その係り受けを明快にする。

・第6章 「構文上の手がかり」を使用する

「構文上の手がかり」=Syntax cues とは、読者が文の構造を正しく分析して、文の各パートを特定させる手助けになる言語の要素またはアスペクトのことを言う。接尾辞、冠詞、前置詞、助動詞、語順などがある。以下のようなメリットがある。

- ① 文章構造を分析しやすくする
- ② 非英語ネイティブの読解を促進する(冗長さがテクニカルライティングと反する)
- ③ 次の展開を予測しやすくする(予測できるということは、可読性を高めることになる)
- ④ 曖昧さを除く
- ⑤ 翻訳者が誤訳しないですむ

[例] To 不定詞マーカーを使う

- 誤 You cannot use the Edit function to change the designated file, set up the Utility, or protect the data.

- 正 You cannot use the Edit function to change the designated file, **to** set up the Utility, or **to** protect the data.

最初の文は、文法的に問題はないが、4つの動詞の関係がわかりにくく、内容が曖昧になっている。こういった場合、文意を正しく理解するために、読者は文の前後関係を確認することが必要になる。読者を戸惑わせないためにも、“set up”と“protect”をTo不定詞にして、その文法構造を明示する。

・第7章 -ING形の意味を明快にする

たとえば、意味を明快にするために、必要に応じて-ING句に読点を打つ。

[例] - 誤 Restart the servers **following** these guidelines:

- 正 Restart the servers, **following** these guidelines:

最初の文では、カンマがないので、“following”が“servers”を修飾しているように見えるため「これらのガイドラインに沿ったサーバー」という意味に取り違えてしまう。

・第8章 句読法とキャピタリゼーション

たとえば、普通名詞はキャピタリゼーションしない。

[例] - 誤 The Advanced Search **Dialog Box**

- 正 The Advanced Search **dialog box**

“dialog box”は普通名詞であり、固有名詞ではない。“Dialog Box”と不用意にキャピタリゼーションすることで、この用語が多言語展開時に翻訳されたり、翻訳されなかったりして、むだなバリエーションが生じることになる。結果として、わかりにくくなってしまう。

以上のことから、このスタイルガイドラインは、以下の3つの大きな特長を有していることがわかる。

①「英文をわかりやすく書くための約束ごと」に特化している。この種のスタイルガイドラインは、これまでに存在しなかったものであり、画期的な内容になっている。既存のガイドラインは、スタイルや文法など「コミュニケーションを進めるための基本的な約束ごと」を示すものである。

②「世界共通語としての英語」を目指している。世界中の非英語ネイティブの読者も対象にしている。結果として、非英語ネイティブの翻訳者が翻訳のマスターとなる英文をスムーズに理解でき、英文を誤訳しないですむ。その効果として、翻訳の時間短縮とコストダウンが期待できる。加えて、翻訳メモリーの効率的運用や機械翻訳との連携についても考慮している。

③「マニュアルやヘルプ向けの英文を書くためのスタイルガイドライン」である。内容がソフトウェアのマニュアルやヘルプのものなので、実務を担当しているライターが、生きた事例として具体的に参考ができる。既存のスタイルガイドラインは、「英語ネイティブが学術的な研究論文を書くための参照資料」なので、それを一般的な技術

文に応用するためにはそれなりの知識を要する。

### 5.2.3 グローバルイングリッシュスタイルガイドとほかの技術との違い

以下の表に、ほかの技術やルール、そして類似した書籍との違いをまとめる。

表 2 ほかの技術やツールとの違い

テクニカルライティング	グローバルイングリッシュ	シンプルファイドイングリッシュ
論理性	わかりやすさ	簡易性
冗長性の排除	多少の冗長性	文法や単語を厳しく制限
英語ネイティブに最適	非英語ネイティブにも最適	即席的、簡易的な理解
自然な英語	自然な英語	不自然な英語

表 3 ほかの技術やツールとの違い

The Global English Style Guide	NASA SP-7084 1998 <sup>†9</sup>
世界共通語としての英語	英語ネイティブ向け
翻訳されることを前提としたもの=誤訳しないための配慮	論文など学術的なドキュメント=ネイティブにとっての格調の高さ
一般的なマニュアル制作向け=わかりやすく書くためのルール	上級者向け=細部にまで言及
「一般化」、普遍化を目指す	NASA 向けのルール
センテンス単位であり、パラグラフ構成などは対象外	

## 6. まとめ

このグローバルイングリッシュスタイルガイドを活用することで、ローカリゼーションのマスターとなる英語版を世界中の読者に対してわかりやすくすることができる。また、「世界共通語」としての「グローバルイングリッシュ」を書けるようになる。日本人ライターにとっても、世界共通語としての英語＝グローバルイングリッシュの実現が可能になると思われる。

[注]

†1 YAMAGATA INTECH 株式会社 / YAMAGATA INTECH Corp.

†2 Localisation : ローカリゼーションだけを「イギリス英語」表記にしている。その理由は、ローカリゼー

ションは、これまでヨーロッパを中心に進められてきたものだからである。

†3 The Global English Style Guide (2008, SAS) : 企業向けのソリューションソフトを開発している米国企業の SAS が、2008 年に発行したスタイルガイドライン。著者は、SAS 社ライティング部門のシニアエディターである Mr. John Kohl。自社内の 130 名にもおよぶライターやエディターが長年にわたって蓄積してきた経験やおかしてきたミス、ジャンルごとにまとめ直し、個々に対応策を示したものである。

†4 FIGS : 英語以外のヨーロッパの主要言語のこと (フランス語、イタリア語、ドイツ語、スペイン語)

†5 一般化 : この用語については、弊職が、2004 年発行の「コンピュータ翻訳&ローカライズ」(2004,イカロス出版社)で説明している。なお、この Internationalization を「国際化」と訳すと、原義から外れてしまい、Globalization と紛らわしくなる。

†6 LISA : Localization Industries Standards Association ローカライゼーションの業界団体の 1 つ。

†7 GILT の各用語 : 各用語は、LISA のサイトで定義づけられている。

†8 シンプルファイドイングリッシュ Simplified English : 使用する単語や適用する文法に厳格な使用制限を設けることで、英文をわかりやすくするもの。英語としてぎこちない表現になることが多く、エンドユーザー向けの商品にはあまり使用されない。

†9 邦題は、「NASA SP-7084 1998 ハンドブックに学ぶテクニカルライティング」